

# アフリカ出張所感

三菱商事株式会社  
[代表取締役社長]

小島 順彦  
Yorihiko Kojima



本年9月に南アフリカおよび隣国のモザンビークを訪問した。

南アフリカの歴史は古いが、1994年の民主権誕生以降では13年しかたっておらず、まだ発展途上の国である。アパルトヘイト撤廃に貢献し国民から圧倒的な支持を受けて誕生したマンデラ元大統領、その後継者のムベキ大統領による現実的な政治運営により、南アはさまざまな課題を抱えつつも着実な経済成長を遂げ、「BRICS」の「S」はSouth Africaを指すといわれるほど、サブサハラアフリカのGDPの40%を占めるアフリカの経済大国としての地位を確立した。現在は2010年のサッカーワールドカップ開催を控え、関連施設の建設も始まっている状況である。

隣国のモザンビークは、17年にわたる内戦が終結した1994年当時は「世界の最貧国」であったが、ここ数年の経済成長率の平均は7%に達しており、今では「南部アフリカの優等生」とも称されている。わが社は、モザンビークにおいてモザールプロジェクト（アルミ製錬工場）に参画しているが、本プロジェクトが順調に推移するとともに、モザンビークの経済成長が進んでおり、プロジェクトを通じてモザンビークに貢献する一端を担えたことをうれしく思っ

た。これに加え、モザールではモザール地域社会開発基金を設立、学校建設、水道敷設、職業訓練学校の開設、HIV/AIDS対策やマラリア対策を中心とした衛生教育等、地域へのCSR活動を行っている。今回、その小中学校等を訪問したが、中学校では、日本の青年海外協力隊から派遣されている二人の教員とお会いし、元気で活躍されていることに感銘を受けるとともに、官民連携の新しいかたちではないかと感じた。

2008年は洞爺湖サミット、第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）が開催されることもあり、「日本・アフリカ交流年」と位置づけられている。1970年代以降アフリカは経済的に低迷してきたが、ここ数年は資源高を背景に5%以上の経済成長率を達成し、成長するアフリカへ変化している。世界中がエネルギー・金属資源の宝庫であるアフリカに注目している状況下、この成長が一過性のものに終わらず、アフリカの真の持続的発展に結びつくためにどうしたらよいか、官民一体となって考える機会となるよう願う。わが社も微力ながらアフリカへのCSR活動をさらに進めつつ、将来的にアフリカの次世代に裨益するようなプロジェクトがさらに構築できるよう努めたいと思っている。